

## 臨済系『碧巖録抄』の諸本について

はじめに

筆者は、中世日本語研究資料としての抄物の諸本を調査して、原典が漢籍經子史部と集部のものについては、次の二つの目録を作成した。

抄物目録稿(原典漢籍經子史部の部) 訓点語と訓点資料七〇 一

九八三・八

中国古典と五山の抄物——集部抄物一覽稿——川口久雄編『古典の変容と新生』明治書院 一九八四・一一

ついで、仏書に対する抄物の目録を作成しなくてはならないが、伝存する本が多く、調査と考察が遅れている。しかし、近時言われている抄物言語研究の停滞に思いをいたし、現時点で調査・考察しえているところを報告して、今後の研究に資したい。

本稿では『碧巖録』に対する抄物を取り上げる。ただし、曹洞系『碧巖録抄』(伝万安英種抄を含む)については金田弘『洞門抄物と国語研究』があるので、省略に従う。

柳 田 征 司

(国語学研究室)

### 一、大智祖継抄カ碧岩集抄

○碧岩集抄 一〇卷存卷三 大智祖継抄カ〔室町末江戸初期〕写 一冊

松ヶ岡文庫藏(クハ二八)

茶色表紙(縦二六・三糎×横一九・八糎)。外題「碧岩補闕抄全」と墨書打付け書き。表紙に「冬」「黄」「辰」と白書。表紙見返に「臨滄山大仙寺常住本」と墨書。卷首に朱印「積翠軒珍藏」あり。内題「碧岩集抄卷之三」。尾題「碧岩集卷之三抄」。第二一則から第三〇則まで存す。半面一三行。朱句切・朱引を加う。次の奥書がある。

右江州岐陀開山大智和尚抄於／豆州奥守福寺書之トアリ／墨付四十

「二」「三」を墨消し、右傍に) 枚

『石井積翠軒文庫善本書目』二七頁掲出。『国書総目録』は、「碧巖集鈔」の項に「積翠(卷三、慶長写一冊)」をあげ、「碧巖補闕鈔」の項に「松ヶ岡」をあげるが、これは同一書であろう。

○碧岩集抄 一〇卷、大智祖継抄カ〔江戸中期〕写 一〇冊 神宮文庫藏(一五〇五)

黄土色表紙（縦三〇・五糎×横二一・二糎）。外題「碧巖集鈔」と墨書打付け書き。表紙裏打に古文書を用いる。

（第一冊）□英岳和尚御代蔵主官錢之事／合二貫文此外二百文  
仏并羅漢／所納如件／丑年八月晦日 維那 中敦／侍衣 周仙／都寺 徳昌／奉行 文英

（第二冊）□英岳和尚御代蔵主官錢之事／合貳貫文此外二百文  
仏并羅漢／納如件／□享四丁卯年九月三日維那／通順（花押）／侍衣／法穩／都寺／妙坤（花押）／奉行／昌澄（花押）／參暇

「□享四丁卯」は延享四年丁卯（一七四七年）。内題「碧岩集之抄卷第二」  
「碧岩集抄卷之三」など。内題のない冊もあり。巻首に朱印「林崎文庫」あり。半面一四行。朱句切・朱引を加う。

○『国書総目録』は「碧巖補闕鈔」の項に堀内平次郎をあげる。

### 二、岐陽方秀抄碧巖不二抄

○碧巖不二抄 一〇巻 岐陽方秀抄 応永三三年写周瑚筆 八冊 東福寺蔵

原本筆者未見。『碧巖不二抄』は、慶安三年整版（駒沢大学図書館蔵一四一―一四四）、明暦三年整版（同前蔵一四一―一四五）を見ると、漢文注であるが、吉沢義則「濁点源流考」に次のように見るところからすると東福寺本は仮名抄か。

仮名の抄物は何時から始まったかに就ても精確な知識を与へる材料はない。現存中この最古の書は岐陽方秀の碧巖不二抄八冊である。

然し今日伝はつてゐるのは岐陽示寂の翌年則ち応永卅二年西暦一四二五に周瑚が写し伝へた書物である。（二九五頁）

### 三、抄者未詳碧巖抄

○碧巖抄 抄者未詳 文安二年写 一冊 蓬左文庫蔵（一〇四―七三）

薄茶色表紙（縦二七・〇糎×横二〇・一糎）。外題「碧巖抄 完」と墨書打付け書き。内題「円悟禪師碧岩集」。半面一〇行、注細字双行。朱引少々あり。次の奥書あり。

□時文安二年乙丑三月廿日書写早筆者急以／雖為愚筆後代之為公用  
任本写候之也／外見不許可秘之云々

丁之數悉皆八十四丁也云々／七十四紙  
漢文注であるが、極めて稀に仮名交りのところがある。

少売弄 莫自誇方語也言賤買高売義也  
ホウチヤウカマシト云義也又ハ瞞人義也

### 四、靈山□雅講碧岩録抄

○碧岩録抄 一〇巻 靈山□雅抄 「江戸初期」写 一〇冊 京都府立総合資料館蔵（特二六二―二四）

新装焦茶色表紙（縦二七・七糎×横一九・八糎）。原黄土色表紙。原表紙中央下方に「庚八」の貼付紙あり。小口に「碧抄一（く十）」と墨書。巻首に朱印「泉州堺集雲菴」「宗／縁」（朱鼎印）。巻中に朱印「智／環」あり。首に「碧岩集／普照序」などあり。半面一三行。朱句切・朱引を加う。次の奥書がある。

宝徳三年六月二日靈山雅蔵司之講始同四月十二日講竟同七月廿七  
日絶筆於大徳本坊北向之寮／抄中凡例雅蔵司举古人之両三義私判之  
或破抄家之義則書／清隱之義也／又称桃隱曰徳柔侍者也蓋余之伝菴  
非臨碧岩講序也

新村出「桃源瑞仙の事蹟」、大塚光信「史記抄について」が指摘するよう  
に、『史記抄』一七奥書中に、桃源が雅蔵司の講筵に出て『人天眼目』  
と『碧巖録』の聞書を作っていたことが見える。第一冊は漢文体のところ  
が多いが、第二冊以下は仮名交りのところが多い。

## 五、抄者未詳碧巖錄抄

○碧巖錄抄 一〇卷 抄者未詳 永正二年写 一〇冊 松ヶ岡文庫藏  
(八一—四九)

共表紙(縦二六・三糎×横一九・〇糎)。坊主綴。表紙左下方に「(一十)」と冊を墨書する。卷首に陰刻朱印「宗悦」あり。墨有界(界高二・九糎、界幅一・七糎)半面一〇行、注双行。第七・一〇冊尾欠。次の奥書がある。

(卷一) 永正十稷癸酉秋念三日 釈之桃波伝写之(墨印「桃/波」)  
(卷二) 永正十稷癸酉秋念三日於常陽釈之桃波伝写之(墨印「桃/波」)

(卷三) 釈氏桃波書(墨印「桃/波」)

(卷五) 永正十季臘月十日 釈之桃波書之(墨印「桃/波」)

(卷八) 永正拾一年<sup>甲戌</sup>正月十三日 釈氏桃波(墨印「桃/波」)

(卷九) 永正十一年<sup>甲戌</sup>正月十三日 釈氏桃波書(墨印「桃/波」)

卷首を少し引用しておく。

「碧岩集」(大字) 澧州夾山善劣禪師開山遂成院宇有僧問如何是夾山境夾山曰猿抱子婦青嶂裏鳥啣花落碧岩前後來円悟注此山時(中略)「碧巖錄卷第一」(大字) 碧岩ト云義ハ最初ニ委細見タリ鉢ハ説文十黍重曰鉢隔山見烟知火隔——知牛一舉一明三目——両ヲ弁スル底ハ尋常ノ中 伶俐ノ漢ナントモ衲僧家ニハ朝夕茶飯喫スル底事ナリト云義也目機鉢両、秤ノ目并ニサヲ鉢ハ錢一文之内ヲ六二分テルヲ云也両トハ四文目也言ハ秤ヲ拳ナン分ナン両ト并謂也又云鉢ハ自「蚤口出合」十糸曰鉢十鉢、為十分、為両、又云隔山見咽隔墻見角是ワ偽山仰山、門庭ナリ凡、機前、接人シ頃夕伶俐、鉢裁也「見」仏法ノ一機、或ハ見一境、始終无遺、透見スル謂也譬、

臨濟系『碧巖錄抄』の諸本について

如<sup>下</sup>見一角<sup>ヲ</sup>知牛全鉢<sup>ヲ</sup>如<sup>下</sup>見烟知火三味ノ度火无边<sup>上</sup>隔山ノ語ハ出「涅槃經」(大字)「雪豆」(大字)ハ寺ノ名ナリ雪豆ハ雲門四世、孫也重顕禪師ト云ナリ雲門云再来トイヘリ是故「重顕ト名ク」截断衆流」(大字)凡ソ禪ノ宗師、学者ヲ入<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>立<sup>テ</sup>難<sup>シ</sup>近傍<sup>」</sup>処ヲ云也又ハ帝曰对朕者誰ト磨云不識

## 六、笑嶺宗訶抄碧岩口義(木杯余瀝)

○碧岩口義 一〇卷 笑嶺宗訶抄 天正二年写 二冊 国学院大学図書館藏(五〇九・五一〇)

茶色表紙(縦二五・三糎×横二一・〇糎)。外題題簽に「木杯余瀝」(自一至五)と墨書。表紙右上に小貼付紙「留」あり。中央に大貼付紙あり、次の通り墨書する。

此抄物二冊笑嶺講談之後、被付余愚拙達而雖辞、再三以賜故今拝受了也、以後者南宗抄出箱可被、入事肝要也、天正二年五月七日、<sup>凍子</sup>紹滴(花押)

小口に「木杯」と墨書。遊紙に朱印「臨/川」「青谿/書屋」あり。内題「碧岩口義(第一卷)」。半面一三行。朱句切・朱引を加う。首に朱印「玄性藏本」「小汀氏藏書」、墨印「阿部/□家」あり。「木杯」は椿庭海寿(一三二八—一四〇一)の別号。

○碧岩口義 一〇卷 笑嶺宗訶抄〔近代〕写 二冊 松ヶ岡文庫藏(クハ一九)

新装茶色表紙(縦二六・九糎×横一九・一糎)。外題題簽に「木杯余瀝(自一至五)」と墨書。表紙に貼付紙、次の通り墨書する。

此抄物二冊笑嶺講談之後、被付属愚拙達而雖辞、再三以賜故今拝受了也、以後者南宗抄出箱可被、入事肝要也、天正二年五月七日、<sup>凍子</sup>紹滴(花押)

扉に「木杯余瀝<sup>自一</sup>五」と墨書。内題「碧嶺口義第一卷」。半面一〇行。  
○なお、玉村竹二「禪の典籍」によると、椿庭海寿の『碧嶺録抄』が東大図書館に所蔵されていたが、関東大震災で焼失したという。上村觀光「室町時代五山僧の抄書一斑」<sup>(マ)</sup>五四頁にもそれと見られる本が掲出されている。

### 七、林宗和抄カ碧巖抄

○碧巖抄 一〇巻 林宗和抄カ 慶長一八年写 一〇冊 土井洋一氏蔵  
原本筆者未見。土井洋一「宣賢講『莊子抄』の成立とその価値」一一頁による。外題「青嶂裏口蒙」とある由。次の奥書があるという。  
弘治第二丙辰秋七月晦日 三関齋書之 永禄三年庚申二月七日宗二

書之／慶長拾八年千里不及書之

○碧巖抄 一〇巻 林宗和抄カ 書写年未詳 一〇冊 岸沢惟安氏蔵  
原本筆者未見。『国書総目録』に「〔三関齋本碧岩抄〕、弘治二三関齋写一〇冊」と見える。

○碧巖抄 林宗和抄カ 書写年未詳 五冊 禅居菴蔵  
原本筆者未見。上村觀光氏の抄物調査ノート『採訪録』に、「禅居菴所蔵、卷末に宗二云々の識語あり、両足院本と合せ見るべし」と見える。右の本と同系か。また、両足院にも同系本伝存するか。

### 八、景聡興勗講大圭紹琢聞書碧岩集抄甲本

○碧岩集抄 一〇巻 景聡興勗講大圭紹琢聞書 〔室町末江戸初期〕写

一〇冊 松ヶ岡文庫蔵(ハ一一四〇)

茶色表紙(縦二五・九糎×横一九・九糎)。外題「碧岩集抄(卷之二)」と墨書打付け書き。表紙外題下方に「共十」と墨書。表紙中央に「辰」「巨」「又ノ七八」と墨書。「巨」字の下には白書「巨」あり。表紙見

返に「臨滄山大仙寺常住本ノ共十」と墨書。卷首に朱印「宗悦」あり。半面一六行。朱句切・朱引を加う。次の奥書がある。

(卷二) 卷之二終至祝々

(卷六) 元龜元林鐘廿三於道樹下講余睡中写焉若許他見奈魚魯矣素願成就

(卷一〇) 講師吾道樹和尚也天文癸卯歲之講始仲冬廿一日終于甲辰季ノ夏十一日又後卯年講始于卯月七日忘其終弘治三年丁巳講始ノ于卯月廿一日終于八月八日夫円悟和尚大禪師者於蜀之成都府崇寧ノ万寿禪寺并夾山道林之三刹三度曾講此录吾道樹老師亦於汾陽道樹二刹三度被講之合其符者可謂円悟禪師後身予亦(左傍に「大圭和尚也」と墨書)ノ三度雖侍講席之末而一字不聞矣

○碧巖抄 一〇巻 景聡興勗講大圭紹琢聞書 〔江戸前期〕写 愚堂東寔筆 五冊 松ヶ岡文庫蔵(クハ五)

水色表紙(縦二七・一糎×横二〇・三糎)。外題題簽に「碧巖抄(一之一)」と墨書。表紙、題簽の下方に「辰」と墨書、「又ノ七八」と朱書。表紙中央に「土」と墨書。小口に「碧岩抄(一)」と墨書。表紙見返に「臨滄山大仙寺常住本ノ大仙十世愚翁手跡」と墨書。朱印「積翠軒文庫」あり。半面一六行。七丁表に「凡叢林ニ碧ヲ講スル事ハ竺仙在唐時伝来テ椿庭ニ伝……」とある。内題「仏果円悟禪師碧岩録(卷第一)」。卷六末に次の奥書がある。

元龜元林鐘廿三於道樹下講余睡中写焉若許他見奈魚魯矣素願成就第九五則垂示まであり、後、白紙が三〇枚余残る。『石井積翠軒文庫善本書目』三六六番掲出。図版第三五八図。

○碧巖録抄 一〇巻 景聡興勗講大圭紹琢聞書 〔近代〕写 一〇冊 花園大学図書館蔵

原本筆者未見。古田紹欽「松ヶ岡文庫所蔵禅籍抄物集解題」一六頁に

よる。次の奥書があるという。

不是景聡禪師之臆断大主和尚之聴書也文禄二癸巳仲春如意珠日謹書  
焉

### 九、虎哉宗乙講碧巖録抄

○碧巖録抄 一〇卷 虎哉宗乙講 天正二年写 五冊 松ヶ岡文庫蔵  
(クハ四)

薄茶色模樣表紙(縦二七・三糎×横二〇・二糎)。小口に「碧抄(一之  
二)」と墨書。「碧岩序之臆断」あり。内題「仏果円悟禪師碧岩録(卷  
第一)」。半面一六行、原典本文二行取り。次の奥書がある。

(卷二・四・六末) 維時天正二曆<sup>甲戌</sup>孟冬吉莫於臨照山下書了/宗允  
焼香九拜

(卷八末) 維時天正<sup>甲戌</sup>孟冬吉莫於臨照山下書了/宗允焼香九拜  
(卷一〇末) 維時天正二曆<sup>甲戌</sup>孟冬吉莫於臨照山下書了/虎哉師講本  
也/宗允焼香九拜

『松ヶ岡文庫所蔵禪籍抄物集』第一期に影印されている。『石井積翠軒  
文庫善本書目』五五番掲出。図版第四七図。巻首に次のようにある。

楞伽 竺仙和尚院号也南禪在之  
木盃 椿庭和尚軒号也南禪在之 南禪椿庭海寿作  
碧岩抄号木盃余撰  
不二 岐陽和尚庵号也東福栗棘庵在之  
(影印) 或云二自悅和尚一也

○碧巖録抄 一〇卷 虎哉宗乙講

『松ヶ岡文庫所蔵禪籍抄物集』第一期に影印されている。

### 一〇、景聡興勗講大主紹琢聞書碧巖抄乙本

○碧巖抄 一〇卷欠卷六 景聡興勗講大主紹琢聞書 (室町末江戸初期)

写 九冊 松ヶ岡文庫蔵(ハ一〇四三)

水色表紙(縦二七・八糎×横二〇・七糎)。外題「碧巖鈔(卷)」。「碧  
(卷之二)」と墨書打付け書き。表紙中央に「曰」と墨書。小口に「碧  
岩臆断」と墨書。「碧岩序之臆断」あり。半面一五行。朱句切・朱引を  
加う。巻尾に墨印「物/周」あり。卷一〇に、甲本松ヶ岡文庫蔵ハ一一  
四〇本と同じ奥書があるほかに、次の識語がある。

不是景聡和尚之臆断大主老漢之聴書也/天正三年<sup>乙亥</sup>大主老漢之講始  
初夏十二日終七月廿五日矣

○碧巖集抄 一〇卷 景聡興勗講大主紹琢聞書 (江戸初期) 写 一〇  
冊 東京大学文学部国語研究室蔵(二二A一二八)

外題「碧岩集鈔」と白書打付け書き。巻首に「江南山/梅英寺」と墨  
書し、墨印「梅/英/寺」あり。半面一三行。次の奥書がある。

講師吾道樹和尚也天文癸卯歲之講始仲冬廿一日/終于甲辰季夏十一  
日又後卯年講始卯月廿日忘其終/月日弘治三年丁巳講始于卯月廿  
一日終于八月八日夫円/悟和尚大禪師者於蜀之成都府崇寧万寿禪寺  
并夾山/道林之三刹三度曾講此录吾道樹老師亦於汾陽樹/二刹三度  
被講之合其符者可謂円悟禪師後身子/亦三度雖侍講席之末而一字不  
聞矣至祝:

不是景聡禪師之臆断大主和尚之聴書也  
巻首に次のようにある。

楞伽 竺仙和尚院号也南禪寺有之  
木杯 椿庭和尚軒号南禪寺之有之諱寿或云椿庭和尚院号東/福之三  
聖有之蓋而処有之歟或云異号椿庭者竺仙真子  
不二 岐陽和尚庵号東福「栗」(「栗」を見せ消ちにし、右傍に)棘  
菴有之諱秀

黒河 月菴和尚大安開山新松堂師也

卿 事苑ノ注ヲスル人

○碧岩集抄 一〇卷 景聰興勗講大圭紹琢聞書 (江戸前期) 写 一〇

冊 岩瀬文庫蔵(一四二一八)

焦茶色表紙(縦三〇・五糎×横二一・九糎)。外題題簽に「碧岩集抄

(二)」と墨書。表紙題簽下に小貼付紙「宇」あり。小口に「碧抄(二)」

と墨書。卷首に朱印「岩瀬文庫」「大林寺蔵本」あり。巻尾に朱鼎印

「龍ノ関」あり。半面一二行、原典本文二行取り。朱句切・朱引を加う。

卷首に次のようにある。

楞伽 竺仙和尚「院」(右傍補入)号也南禪有之

木盃 椿庭和尚軒号也南禪有之諱寿或云椿庭和尚院号東福之ノ三聖

有之蓋兩処有之歟或云異号椿庭者竺仙之真子

不二 岐陽和尚菴号也東福栗棘庵有之諱方秀也

黒河 月菴和尚大安開山訶松堂之師也

卿 卿睦庵也事苑ノ注ヲスル人也唐人也

○なお、『新禅籍目録』に

碧巖集景聰臆断 ②一〇卷③景聰興勗④写(大永五年乙酉五月廿三

日於大慧精舎書終)⑥禅の書今津説

と見える。右の景聰系の抄の一本と見られるが、「禅の書今津説」に当

つていない。

一一、抄者未詳碧巖録抄

○碧巖録抄 一〇卷存三卷 抄者未詳 (室町末江戸初期) 写 一冊

駒沢大学図書館蔵(一四一一一〇)

薄茶色表紙(縦二六・六糎×横二〇・三糎)。外題題簽に「碧眼胡」と

朱書(「一」は墨書)。表紙右方に「四九十」と墨書。表紙見返を扉とす

る。それに「少林禅」と墨書題する。扉裏に「四九十不足」と墨書す

る。卷首上欄外に「隣ノ花ノ公ノ用」と横書き墨書。半面一八行、原典

本文二行取り。朱句切・朱引を加う。三丁裏に次のようにある。

楞伽 竺仙和尚院号也 南禪在之

木盃 椿庭和尚軒号也 南禪在之

不二 岐陽和尚庵号也 東福栗棘庵在之

内題「仏果円悟禅師碧岩録(卷之一)」。はじめの方は漢文注であるが、

後半は仮名交り注が多くなっている。全九二丁。

一一、抄者未詳碧岩集録抄

○碧岩集録抄 一〇卷存卷二・四・五・八 抄者未詳 天正一三年写

四冊 寿岳童子氏蔵

寿岳童子教授蔵抄物展において一見。焦茶色表紙。表紙右上方に「宇

と朱書。内題「仏果円悟禅師碧岩集録(卷第二之)抄之始」。四周墨界。

半面一四行。次の奥書がある。

(卷四) 于時天正十三季潤八月十八日万喜岡門御下書之 無角之

(卷五) 岡門和尚御下而書之ノ于時天正十三年九月八日 浄教沙門

鎮西末流無角書之

前記抄物展の『展示目録』に卷二のオの図版を収める。また、『国語学辞

典』五三六頁には卷五末の図版を収める。

一一、抄者未詳碧巖私之抄

○碧巖私之抄 抄者未詳 (室町末江戸初期) 写 一冊 叡山文庫蔵

(真如蔵二四一二一一一五四五)

焦茶色表紙(縦一九・一糎×横一二・五糎)。外題表紙中央に「碧巖略

抄全」と墨書打付け書き。表紙右方に「山門東塔南谷 浄教房」、左方に

「真如蔵百五十五 鞠」と墨書。小口に「碧巖略抄全」と墨書。卷首に「山

門東塔南谷 淨教房 真如藏百五十五 鞠」と墨書。内題「碧巖私之抄物不許他人之見視云々」。半面九行。語句を抜き出して簡単な注をつけたもの。後半になると仮名交り注が多くなっている。次に第六十一則を例示する。

機宜 機先也 緇素 黑白也 寰中 京都也 興盛 ヲコリ盛也 喪亡 ハホロヒナキ

薦得也 ハタタタ 滯殺 文ノ上ハ卷ヲ 迷封 処ナリ 封シル 触途也 々々 壟蹙口ヲ

クスムル也 謀臣 ハ臣下也 猛将 猛キ將軍也 麒麟 日千里行好馬也 鳳凰 好

鳥ナリ 三家村里 山カツ家二三 颯々 ハ風ノツヨク 謳歌 楽ミ歌フ 音響 ハ

々々 金屑 々々 翳 ハマケナリ 已靈 ナリ 靈神光也 納被蒙頭 衾ヲ頭ニカフ

リ坐ル也 神仙 ハ別ノ世界ト云也 黃梅 ハ五祖ノ住所也 山ノ名也 条章 別

一ノ文章 双提 ハ双テ提ルナリ 雄基 大ナル万事ノ 点胸 ハ胸ヲ点ル

旁若無人 カタワラニ 掃地 地ヲハク也 雲扈羅漢 ハ方語 ナリ

#### 一四、抄者未詳碧岩抄

○碧岩抄 一〇卷 抄者未詳 〔室町末江戸初期〕写 一〇冊合綴四冊

叡山文庫藏(天海内典三〇―四一四七五)

薄茶色表紙(縦二六・六糎×横二〇・三糎)。外題「碧岩鈔(一一) 十合四」と墨書打付け書き。第二冊外題「鈔三四」の部分の下に「第二鈔」の字を擦消する。表紙右上方に「離」と墨書。第二・三冊には表紙右下方に「天海藏」と墨書する。目録あり。巻首に墨印「天海藏」あり。半面一一行。朱句切・朱引を加う。内題「碧岩抄(卷之一)」。「大光」「大心」「徹心」の名が見える。

#### 一五、抄者未詳碧岩抄

○碧岩抄 一〇卷 抄者未詳 〔室町末江戸初期〕写 一〇冊 松ヶ岡文庫藏(ハ一一三九)

茶色表紙(縦二六・三糎×横二〇・二糎)。外題「碧岩鈔(一一) / 碧岩鈔」と墨書打付け書き。表紙右上方に「宙」と白書。表紙見返を扉とし、「碧岩之抄」と墨書題す。その下方に陰刻朱印「宗悦」あり。扉裏に「宇田/大通寺」と墨書。表紙裏に古文書あり。第一冊のみ小口に文字の跡あり。半面一六行。朱句切・朱引を加う。抄中に「景聰云」「玉浦云」「木杯云」「林云」「不二抄」と見える。第一垂示の部分の一部引いておく。

「第一垂示」(大字) 垂示ハ每古則有垂示言挙其公案大応以示学者云者也今ノ垂示代語ハアルマイ義ソ大衣ノ無言ノ処テ代語アルソ別記トハ後ニソハカラ批判スルソ也○隔山見——火ナルヲヲノ点好シ又云火ノ点花園点凡ハ以体無用是ハ以用知体大光云從浅至深大応云自妄入真大灯云山青水录隔山——法相ノ三支三用ノ義三量ノ者比量現量証言量也比者浅也現者深也証言者次也

#### 一六、抄者未詳碧岩録抄

○碧岩録抄 一〇卷 抄者未詳 〔室町末江戸初期〕写 一〇冊 松ヶ岡文庫藏(クハ三)

薄茶色表紙(縦二九・二糎×横二二・〇糎)。外題「碧巖抄(一一)」と墨書打付け書き。小口に「碧岩抄(一一)」と墨書。巻首に朱印「金地院」「積翠軒文庫」「大/淑」あり。第二冊首には更に朱印「道/林」あり。表紙見返に次のように書く。

林ニ碧岩ヲ講スル事ハ竺仙在唐ノ時伝来テ椿庭ニ伝フ椿庭是ヲ岐陽ニ伝フ岐陽已来江西等講之棧伽ト云ハ竺仙也椿庭ノ師也木盃ハ椿庭ノ軒号建長ノ前任也不ニハ岐陽ノ軒号也東福栗棘庵ニアリ諱ハ芳秀也竺仙諱ハ梵仙也茂古林ノ嗣珙横川ノ孫第子也是ハ叢林ノ沙汰吾門下ハ南浦ノ虚堂ニ相伝アツテヨリ大灯以來講之又岐陽ノ卦一冊アリ尤モ妙也然トモ林下ニハ嫌之其故ハ録ヲハ削立テ誦テコソ録デアアレ教相ノ如ニ卦等ヲ用ル事ハ太不可也

内題「仏果円悟禪師碧岩録(巻第一)」。半面一四行。朱句切・朱引を加う。第一冊末に次の識語がある。

義昌(花押)

『石井積翠軒善本書目』五六番。巻首近くを一部引いておく。

仏果円悟禪師碧岩録巻第一

仏果ハ住道林ノ時徽宗ノ所賜号也円吾ハ住金山時南宋高宗所賜号也諱克勤字無着臨濟十世孫彭州駱氏子犀顛月面骨相不凡ヲ從師受書日訂ヒ千言ヲ它生不レ敢齒ヲ一日遊妙寂寺顧見ス仏書ヲ誦シ之三復ス(中略)

△「古則」(大字) 拳ハ拳揚ノ武帝ハ姓蕭名ハ衍臨沂人ノ受宋禪一右手文成武家幻蹈空而行云々信者テ教ヲヨク知レタ教者デヤホトニ教ノ至極ヲ随分ト思テ問タ○廓然ハ明歴々ナ無聖ト云ニ当テ対朕ハ誰ノトガメタ朕ハ人我ノ見ヲ以テ乞ハレタ會元朕我也蔡邕カ曰古者上下共称至秦始皇二十六年始尊カ天子ノ之自稱ス

一七、抄者未詳碧巖抄

○碧巖抄 一〇巻 抄者未詳 (近代) 写 一一冊 松ヶ岡文庫蔵(クハ六)

茶色表紙(縦二六・六種×横一九・三種)。外題題簽に「大道真源禪師碧巖鈔(一)」と墨書。第一冊には「前序後跋」を収める。第二冊遊紙

裏に次の通り墨書する。

凡叢林ニ「此書ヲ」(右傍補入)講フハ梵竺仙在唐ノ時伝来テ「建長ノ前任」(右傍)椿庭ニ伝椿庭東福不ニハ岐陽ニ伝岐陽以來江「西」(南)を墨消し、右傍)湖南講之我門下ニハ南浦禪師ニ虚堂ノ相伝アツテヨリ大灯以來講之

半面一三行。朱句切・朱引を加う。題簽に見える「大道真源」は、東陽英朝(一四二八―一五〇四)の勅誥であるが、抄中に「聡云」と景聡説を引くところを見ると、後の抄であろう。巻首を一部引く。

仏果師注道林日徽宗所賜号也円悟住金山時南宋高宗之所賜号也諱克勤也字無着也碧岩夾山靈泉院額也序ニ懇ニ云タ録收拾ノ記録スル也集也記也巻卷舒也之ル也古上ハ編「竹簡」字、書テ巻ク今ハ冊子ナレトモ不レ改シ旧法ヲ卷ト云ハ次第也居也第一ノ字詳通論十一也一數ノ首也始也道士蔡子曰光問法師惠浄白法華称序品第一未審序ト第一ト何分浄白(中略)

古則

拳梁―録ニ申事ハナケレトモ帝ハ教者教家ノ極意ヲ拈メ第一義ト随分ト思テ問タ如何是聖―□―無聖帝云廓然無聖ナラハ朕ニ対スル者ハ誰ソト武帝心得タ發便去取ントハトラエシメンノ義也又拳梁武帝―武帝ハ教者ナル故ニ拳教家之極則問レタト也聖ハ至聖ソ諦ハ明ソ実ソ至聖ハ真実第一義ソ空有ニ諦ヲ立スル時ハ未對待之処アル也非空非有是レ聖諦第一義教家ノ極則也真俗不二之位ヲ帝極則ン心得テ問タソ崇明教ハ即於「真俗之中」以真諦空ヲ為聖諦第一義 円悟ハ即就真俗中道之三諦以「中道諦」為聖諦第一義也廓然無聖者白日青天ニ一片ノ雲モ無ク晴キツタルカ四方明歴々ナルヲ云無聖ハ仏祖掃跡境界ソ瑞曰廓然迄カ好キ也無聖ハ刺語也又廓―マツスクニ白日青天答テ対朕者誰朕ト云フ字ハ帝ノ我ト云フ心也朕ノ字ハ秦ノ



始皇ヨリ始也無聖ト云ニ当テ誰ト咎メテ云々詳仏祖統記也

### 一八、抄者未詳碧岩錄抄

○碧岩錄抄 一〇卷 抄者未詳〔江戸初期〕写 五冊 松ヶ岡文庫藏  
(ハ一一四五)

黄土色表紙(縦二八・三糎×横二〇・五糎)。表紙左下方に「共五」と  
白書。小口に「碧岩抄一二(九十)」と墨書。背に「共五」と墨書。  
卷首尾に陰刻朱印「宗悦」あり。首尾に墨印「長興ノ副寺」もあり。半  
面一六行。朱句切・朱引を加う。「惟宗和尚云」「瑞溪云」「寿椿庭曰」  
と見える。卷首(10オ)を一部引く。

#### 仏果円悟禪師碧岩錄卷第一

仏果者師住道林之日徽宗所賜之号也円悟者師住金山之時南宋高宗所  
賜之号也諱ハ克勤字無着也録者記也收拾也集也卷者捲舒之義也第者  
居也一者始也第一之字詳通論十一也評唱者評ト云ハハ先ツ惡付語  
人ノアマタ依テ事ヲ一ツ云イ実ヲ云也故ニ言辺平之字ヲ書也唱者一  
人ノ歌ヲ云也又衆而歌ヲモ云説文ニハ導也今ノ心ハ衆ノ振舞ヲ雪豆  
ノ被<sub>レ</sub>頌タラ後ニ円悟之評量スル程ニ如是云タゾ△雪豆者山ノ名在  
明州<sub>一</sub>諱<sub>一</sub>重顯ハ陰之也統灯師ノ伝云雲門識曰二百年後吾道重<sub>一</sub>顯<sub>一</sub>即  
師之名也故号雲門中興也頌古者汾陽ヨリ盛也古人之語ヲ題ニノ頌ス  
ルヲ云也今ハ雪豆ノ頌マテ也語要者簡要也

△乘示寿椿庭曰釣語トハ少シ異ナリ釣語ハ約出<sub>ス</sub>學者語也垂示者萃公  
案大意示學者也△隔山止是牛トハ喩也知火知牛者言句之上テヤカテ  
悟ヲ擬<sub>レ</sub>ノ云也寿曰此ヲ対偶之句ト云也上下ノ句対偶ノ同意也△萃一  
明三者論語子曰萃一隅而示之不以三隅反則吾不与矣一方ヲ見テ知三  
方靈利漢也△目機ハ方語ニ一見便智也銖兩ハ十糸ヲ為銖十銖ヲ為分  
十分ヲ為一兩言不用<sub>レ</sub>秤子<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>目一視<sub>レ</sub>心ノ内ニ機已定<sub>一</sub>一銖一兩以

臨濟系「碧岩錄抄」の諸本について

断<sub>ニ</sub>物ノ輕重<sub>一</sub>也是又俊快靈利底也△是衲僧止茶飯言ハ上<sub>ニ</sub>云処ヲ指

ノ是程ノ靈利ノ漢モ至衲僧家<sub>一</sub>尋常底ソ一段也△至於止流トハ是便  
衲僧之手段也衆流者五湖四海之間逆流順流共ニソ△東湧トハ没蹤跡  
ナル方ヲ云也或ハ自由三昧之義ニ取也△逆流——自由三昧之方ソ△  
与奪——ハ与アタヘツ奪ツ随意ニ振舞ソ是コソ衲僧之振舞ヨ一段也  
△正当恁麼時ハ正ニ如<sub>レ</sub>是云心ニ用也△且道止処從<sub>レ</sub>是古則ニカ、ル  
也△何人行履ハ指達磨振舞也△葛藤ハ文字言句ヲ云藤カヅラノ枝葉  
ニ喩也△截斷衆流瑞溪曰不容擬議不立一塵底也衲僧向上ノ手段也  
指達磨ヲ云ソ△東湧西没若仏始出世時六種震動之義也言達磨截斷衆  
流自西竺來譬如仏ノ始テ出始<sub>一</sub>也

△萃梁武帝止第一義武帝ハ教者ナル故ニ萃<sub>ニ</sub>教家之極則<sub>一</sub>問レタト也聖  
ハ至聖ソ諦ハ明ソ実ソ至聖ハ真実第一義ソ

### 一九、抄者未詳碧岩抄

○碧岩抄 一〇卷存卷七・八 抄者未詳〔江戸初期〕写 一冊 松ヶ岡  
文庫藏(ハ八七六)

共表紙(縦二六・七糎×横二二・二糎)。表紙左下方に「七八」と墨書。  
内題「碧岩(卷之七)」。半面一〇行。次の奥書がある。

五冊之内大陰庵公用ノ庵外不出之但後來受用底者可付与之

### 二〇、抄者未詳碧巖字解

○碧巖字解 存第三六則至第四〇則 抄者未詳〔江戸前期〕写 一冊  
松ヶ岡文庫藏(ハ八七四)

共表紙(縦二七・〇糎×横二一・〇糎)。外題別筆後筆にて「碧巖字解」  
と墨書打付け書き。小口に「四」と墨書する。卷首に朱印「也風ノ流庵  
ノ藏書」あり。半面一〇行。卷首を一部引く。

第三十六

峯長沙一日遊山歸至 [ ] 語アリ古人ハ二六時中此事ヨリ外他事ノ無キニ依テ遊山翫水ニモ徒ハナキノ

今日一日只管落草 去師云一日ハ剩語乎然トモ一日ノ字ヲ置時ハ今日一日自朝至暮又本則ニ一日アル故乎又ハ諸人ヲ空クツ、過サジトテ一日ト云乎

前頭也是落草後頭也是落草 長沙ト首座ト始始終把手詩処ヲ云遊山ニ付テ落草ト云也長沙ト首座ト能知音ノ高ク問ヘハ高答ヘ低ク問ヘハ低ク答ヘノ境界ソ

首座問和尚什麼処ニカ去來 也要勸這老漢ランテモナイ先寿云此句不可然アマリニ没巴鼻也我ナラハ竜戲滄海ト云ヘシ

南浦・徹翁・大応の名が見える。

諸人還知這僧問處麼雲門答處麼若知得両口同無一舌若不知未免顛預両口同無一舌 僧問南浦両口無一舌者兩人ノ口ニ無一舌ト云意カ南浦云両口両舌ト見ヘシ僧ノ一問ト雲門ノ答処ト同キト云義也アリ事ヲ云也顛預ハ無分曉ノ方又大面白ハ向諸人云タ (60オ7)

如麻似粟 徹翁此下語ヲホメテ云鈍ナル者ハ如麻似粟ト云ヤウデ底ニ用テ云一僧下語云充塞乾坤 (64オ10)

誰共澄潭照影寒為復自照為復其人照 大応云知音アラハ昔ニ照セ知音ナクンハ自照セト云リ徹翁云円悟一拶シテ照影寒ト云処ヲ人ニ知シメントスルナリ

一一一、抄者未詳碧巖録抄

○碧巖録抄 一〇卷 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 内閣文庫

藏 (一九三三三四四)

薄茶色表紙 (縦二七・九糎×横二〇・八糎)。外題題簽に「碧巖抄 (一)」

と墨書。小口に「碧巖抄一 (一十止)」と墨書。目錄 (一丁)、「宗門第一書序」 (二三丁) あり。内題「仏果圓悟禪師碧巖録 (卷第一) / 師住澧州夾山靈泉禪院評唱 / 雪竇頤和尚頌古語要」。卷首に朱印「圖書 / 局 / 文庫」。「日本 / 政府 / 圖書」。「内閣 / 文庫」あり。巻尾に陰刻墨印「潮」あり。四周双辺 (縦二一・三糎×横一六・五糎)。黒口、花口魚尾、版心「碧鈔卷幾 (丁付)」。半面一六行、原典本文二行取り。後序あり。無刊記。

○碧巖録抄 一〇卷 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 東北大学 附属図書館蔵 (二B-三二五・一〇一三四)

右と同版。要皮色表紙 (縦二八・七糎×横二〇・八糎)。外題第一冊のみ「宗門第一書序」と墨書打付け書き。第二冊以下なし。第一冊表紙中央に「雪心置之 / 共十」と墨書。各冊表紙に冊数を書く。第二冊表紙には「安国寺」と墨書。右肩に「競」と墨書。小口に「碧巖鈔 (一)」と墨書。卷首上欄外に「雪心 興聖山 / 安国寺」と墨書。卷首に墨印「興聖山 / 安国寺」あり。次の識語あり。

(卷一・二・四・六・八裏表紙見返) 旭ノ玄初 / 法達

(卷三・九・一〇裏表紙見返) 法達

(卷五裏表紙見返) 旭 (某字を書きかけ訂す) 之玄初 / 法達 / 道恩

○碧巖録抄 一〇卷 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 駒沢大学 図書館蔵 (一四一八五)

右と同版。茶色表紙 (縦二八・九糎×横二一・四糎)。外題題簽に「碧巖鈔 (一)」と墨書。小口に「碧鈔一 (一十)」と墨書。卷首に朱印「泉竜 / 智庫」あり。裏表紙見返に「泉竜院什物」と墨書する。後序五丁裏に次の識語がある。

前総持泉竜十三世雪山宗雲代置之 (朱印「霄 / 山」) 「竜 / 雲」)

○碧巖録抄 一〇卷 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 東京大学

文学部国語研究室蔵(一一A七七)

右と同版。茶色表紙(縦二八・五糎×横一九・五糎)。巻首に朱印「竜潭禪寺」あり。

○碧巖録抄 一〇巻 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 叡山文庫蔵(天海内典三〇―五―四七六)

右と同版。丹表紙(縦二八・四糎×横二〇・九糎)。外題原刷題簽「碧巖鈔一(一十)」。表紙右肩に「離」と墨書、右下方に「天海蔵」と墨書。巻首に墨印「天海蔵」あり。また「天海蔵」と墨書。目録、「宗門第一書序」あり。

○碧巖録抄 一〇巻 抄者未詳 [江戸前期] 写 一〇冊 岩瀬文庫蔵(一四四―四九)

灰色表紙(縦二八・七糎×横二〇・七糎)。小口に「一(一十)碧巖抄」と墨書。裏表紙見返に「宝台山什物」と墨書。

○碧巖録抄 一〇巻 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 松ヶ岡文庫蔵(八一五〇―一)

右と同版。茶色表紙(縦二八・五糎×横二〇・五糎)。外題表紙右方に「碧巖集(第三)」と墨書打付け書き。第九冊の巻首に原刷簽「碧巖鈔九」を挿入する。表紙左下方に「刪」と白書。第一冊は表紙欠。小口に「一(一十)碧岩鈔」と墨書。巻一・一〇巻首に朱印「崇福/文庫」あり。巻八裏表紙見返に小貼付紙あり。「濃州長良/崇福寺用」と墨書。朱句切・朱引を加う。上欄外に書き入れあり。

○碧巖録抄 一〇巻 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 松ヶ岡文庫蔵(ハ八九三)

右と同版。茶色表紙(縦二八・〇糎×横一九・一糎)。冊により、原刷題簽「碧巖鈔(二)」残る。表紙に「宇」と朱書。また「黄」と朱書した上に「宇」と白書。第一冊題簽の下方に「十巻」と墨書。小口に「一(一

十)碧岩鈔」と墨書。巻首に朱印「大/狂」「広/沢」あり。

○碧巖録抄 一〇巻 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 山田忠雄氏蔵

右と同版。栗皮色表紙(縦二八・二糎×横一九・八糎)。外題「碧巖集」と墨書打付け書き。小口に「共十 碧巖鈔一(一十)」と墨書。表紙見返に「宗旨/宗乘」と墨書。

○碧巖録抄 一〇巻欠巻一・一〇 抄者未詳 [江戸前期] 整版 八冊 亀井孝氏蔵

右と同版。焦茶色表紙(縦二七・六糎×横一九・七糎)。原刷題簽「碧巖鈔(二)」。

○碧巖録抄 一〇巻 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 蓬左文庫蔵

原本筆者未見。日比野「抄物紹介——その一——」三〇頁による。小口に「二(一〇九)」と墨書。巻首に朱印「吉川/蔵書」ほかあり。

○碧巖録抄 一〇巻 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 相坂一成氏蔵

原本筆者未見。「無刊記碧巖鈔」と題して抄物小系に影印されている。○抄物小系には相坂一成氏蔵二本と所蔵者を記さぬ一本の三本を用いて影印したとある。抄物小系『碧巖集古鈔』第六冊巻末判読注の後のかこみ17、無刊記碧岩抄の訂正・補足1」によると土井洋一氏も一本を所蔵されるという。なお、『国書総目録』が「碧巖鈔」(版東洋大(一〇冊)とする本もこの本か。

(影印)

○碧巖録抄 一〇巻 抄者未詳

『無刊記碧巖鈔』I-VI(抄物小系 一九八一・五、一一、一九八二・五、七、一二、一九八三・四)に影印されている。

二二、抄者未詳碧巖集古鈔

○碧巖録古抄 一〇卷 抄者未詳 [室町末期] 写 一〇冊 大東急記  
念文庫蔵(二三―四〇―三〇二)

新装紫色表紙(縦二八・〇糎×横二一・九糎)。外題題簽に「碧巖録古抄(一)」と墨書。第一〇冊新装表紙の下に共表紙あり。外題「碧岩古抄 十」と墨書打付け書き。表紙の次に横長の紙一紙を綴じる。

入日記 / 一國師百廿則 / 頌公 老冊 / 大雄禪師□□ / 一臨濟録 上下式冊 / 一雲門 四冊 / 家ノ抄 / 一碧岩古抄 拾冊 / 家伝 / 右 / 寛保二壬戌七月五日 / 宗□(花押) / 宗良(花押) / 一仏祖肯訣一冊 / 大雄禪師□□

卷末遊紙に貼付紙

(後筆)「享保十九寅年六月修補之」黄梅常住院外不出

○碧巖抄 抄者未詳 [室町末江戸初期] 写 二冊 東京大学文学部国語研究室蔵(二二A二二九)

外題「碧巖抄(一)」と墨書打付け書き。表紙右肩に「乙」と墨書。卷首に朱印「高源 / 禪寺」あり。半面二三行。

○碧巖鈔 一〇卷 抄者未詳 元文五年写 四冊合綴二冊 国立国会図書館蔵(八二―一三〇五)

新装茶色表紙(縦二七・二糎×横一九・二糎)。外題題簽に「碧巖鈔(一)」と墨書。薄茶色原表紙。外題「碧巖鈔元(亨・利・貞)」と墨書打付け書き。外題下方に「共四冊 洪」と墨書。半面二三行。次の奥書がある。

(第一冊) 元文第五集庚申季夏上澣 祖洋拝書

(第二冊) 元文五年庚申也 / 自季夏二日至十日 / 祖洞拝書

(第三冊) 元文五 庚申 六月十八日 玄震拝書

(第四冊) 元文五竜集庚申初秋上澣 祖問拝書

(江戸前期) 整版)

○碧岩集古鈔 一〇卷 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 松ヶ岡文庫蔵(八一―一三二)

朽葉色表紙(縦二六・八糎×横一九・五糎)。外題原刷題簽「碧巖集古鈔(一)」。小口に「碧岩鈔(一)」と墨書。放免に、「本朝大応大徳大燈徹翁秘鈔令改板」とある。

南浦紹明(大応) | 宗峰妙超(大燈) | 徹翁義亨

内題「碧岩集古鈔(卷之一)」。卷首に朱印「宗悦」あり。四周双辺(縦二一・九糎×横一五・九糎)。白口、魚尾、版心「古則鈔卷之幾(丁付)」。半面一六行、原典本文二行取り。

○碧岩集古鈔 一〇卷 抄者未詳 [江戸前期] 整版 一〇冊 相坂一成氏蔵

右と同版か。原本筆者未見。抄物小系に影印されている。

○『新禅籍目録』に「碧巖集古鈔 一〇卷③宗峰妙超④京都井筒屋刊⑤竜大⑥禪の書」と見える。

(影印)

○碧巖集古鈔 一〇卷 抄者未詳

『碧巖集古鈔』I-VI(抄物小系 一九八一・二、八、一九八二・一、八、一〇、一九八三・一〇)に影印されている。

二二、抄者未詳碧巖集発題

○(碧巖集発題) 抄者未詳 [江戸初期] 写 一冊 彰考館蔵(成部二)

黄土色表紙(縦二八・〇糎×横一九・六糎)。外題「碧巖集」と墨書打付け書き。小口に「碧巖抄」と墨書。卷首に朱印「彰考館」あり。「碧巖集目録」(九丁半)序抄(二〇丁半)後序抄(一七丁)からなる。次

の識語がある。

(卷末) 晋嶺叟(花押) / 附与恩朔老

(裏表紙見返) 寛政六年春獲之

抄中に、「仁岫云」「景聡云」「才翁云」「雷云」「養源抄二」「不二抄云」と見える。

## 二四、抄者未詳碧巖鈔

○碧巖鈔 抄者未詳 [江戸前期] 写 一冊 駒沢大学図書館蔵(忽一〇五七)

薄茶色表紙(縦二六・三糎×横一九・四糎)。外題題簽に「碧巖鈔上中下」と墨書。題簽に朱印「宮端ノ之印」あり。表紙見返に朱印「忽滑谷文庫」「忽滑谷学長功績記念会寄贈」あり。半面一五行。朱句切・朱引を加う。「東陽云」(14オ9)「景聡云」(24オ15)「羅山云日本ニ云タラシガタラシニタラサレタ」(61オ4)と見える。

## 二五、仮名抄であるが系統未詳(一括)

○碧巖録抄 一〇巻 抄者未詳 [室町末期] 写 三冊 成實堂文庫蔵

原本筆者未見。『成實堂善本書目』八九頁による。「室町末期写本。十五行書写。片仮名交り講説。朱墨点附。『大竜寺』印記あり。」とある。

○碧巖鈔 一〇巻 版本 一〇冊 北九州市中央図書館蔵

原本筆者未見。『古典籍総合目録』による。

○碧巖録抄 刊本 叡山文庫蔵(真如蔵)

原本筆者未見。金田弘「叡山文庫と禪籍抄物」二二六頁による。真如蔵二四一—二〇一—一五二五本は漢文注。

○碧巖録抄 抄者未詳 [室町後期] 写 一〇冊 東京大学図書館旧蔵  
原本筆者未見。上村觀光「東京帝国大学図書館抄本識語」、「焼失せる東

大附属図書館所蔵貴重書(一般史学関係)」「(史学雜誌 一九三三・一) 七六頁による。前者に次のように見える。

碧巖録抄 十冊

古写本(永正)、僧惠光筆 冊子、縦七寸九分横六寸 百十七行、

行三十字前後片仮名交り 碧巖録ノ講義ヲ録セルモノ、文体口語風

ナリ 卷十本文講義ノ終リ(後序ノ前)ニ

仏果円悟禪師碧岩録卷十終 惠光焼香押書至祝 珍重

ト記セリ惠光ノ事未ダ考ヘ得ズ館本虚堂録抄(弘治四年戊午写本)モ朱筆

点引アリ 毎冊ノ尾ニ墨附張数ヲ記ス 卷首ニ「景聡」(方八分強

朱字)ノ印、卷尾ニ「大雄蔵書」(縦二寸七分横一寸一分強朱字)

ノ印アリ 景聡名ハ興嗣、大徳寺六十四代玉浦宗珉ノ弟子、曾テ妙

心寺ニ在リテ第一座タリ出テ、美濃汾陽寺ニ住シ後道樹寺ヲ開キテ

第一世トナル永正大永頃ノ人ナリ前出館本虚堂録抄ノ跋ニ同書ノ筆者惠光ノ

一夏之間令講之云々トアリ此頃 曰ク大仙山主景聡老漢八十二齡而弘治戊午

尚ホ生存セシコトヲ知ルベシ 書写年代ハ所蔵者景聡ノ頃即チ永正中ナ

ランカ  
○碧巖抄 抄者未詳 文禄二年写 一〇冊 東京大学図書館旧蔵

原本筆者未見。焼失か。上村「東京帝国大学図書館抄本識語」に次の

ように見える。

碧巖抄 十冊

文禄二年写本 冊子、縦八寸五分横五寸九分 頁十二行、行廿三四

字乃字乃至三十三三字片仮名交り 円悟碧巖録ヲ和解セルモノニシテ

竺仙、椿庭、岐陽、月菴諸師ノ説ニ捫レルガ如シ 卷十ノ尾ニ曰ク

文禄二癸巳仲春如意珠日謹書焉

「随隠寺蔵」黒印ノ印アリ又「宗端」黒印ノ印アリ

○碧巖録抄 抄者未詳 写 二冊 東京大学国語研究室旧蔵

原本筆者未見。焼失か。上村觀光「採訪録」に次のように見える。

碧巖録抄（古写本） 二冊

第一丁ニ「碧抄拔萃」トアリ 此抄ハ熟語ヲ抜キテ抄シタル者ナリ、  
間々「ソ」ノ辞遣ヒアレド、多クハ「也」ヲ用ユ、例セハ即チ得ル  
也、可知也、故也、不得也、ト云フ箇所多シ

○碧巖説心書出 写 一冊 現所在不明

原本筆者未見。『新編書籍目録』によると、「⑥書店目⑦寛永頃写假名  
抄ト延宝写碧岩補闕トラ合冊ス」と。

二六、仮名抄であるかどうか未詳（一括）

○碧巖録鈔 写（文明年間） 一冊 竜谷大学図書館蔵

原本筆者未見。『新編書籍目録』による。

○碧巖抄 写 七冊 建仁寺両足院蔵（廿九函）

原本筆者未見。同院目録による。

○碧岩抄 写 残欠二冊 建仁寺両足院蔵（四二函）

原本筆者未見。同院目録による。

○碧岩抄 写 九冊 建仁寺両足院蔵（一五六函）

原本筆者未見。同院目録による。

○碧巖夾山鈔抄（大灯・徹翁問答） 写 五冊 妙心寺竜華院蔵

原本筆者未見。『新編書籍目録』に次のように見える。

④写（道忠ノ奥書アリ）（中略）⑥大藏会目⑦以上大藏会目記載  
ニヨツタモノデアルガ、夾山鈔ハ寛永・承応頃ニ出タモノ、然ルニ  
ソノ抄トアルモノガ（ ）内ノ記事ニヨルト遙カ以前ノ「大灯徹翁  
ノ問答」トハ如何ナル意味ナノカ

○碧岩抄 元禄九年写 洞春寺第七世天桂碩祐筆 一〇冊 洞春寺蔵

原本筆者未見。洞春寺の『書簿』に見える。

○碧岩抄並後序 存自第六至第一三 写 一冊 天理図書館蔵（吉田文

庫九九—一二三）

原本筆者未見。『吉田文庫神道書目録』による。

○『国書総目録』はほかに次の本をあげる。

碧巖古抄 ⑤茶図成實（首卷欠、七冊）

碧巖言句略抄 一帖 ⑤高野山金剛三昧院

碧巖集考 二卷二冊 ⑤東北大狩野（神奈川円覚寺帰源院蔵本写）

碧巖鈔 ⑤国会（四冊本二種）のうち一種 一種は八二—一三〇五

本であらう。

○碧巖録抄 永正一年写 二冊 東京大学国語研究室旧蔵焼失

原本筆者未見。橋本進吉「国語研究室焼失主要書目録」（国語と国文

学 一九二四・五）一〇七頁、同「同前（承前）」（同前 一九二四・

一一）一〇三頁による。後者に奥書が引かれている。

（乾末）皆永正十一天歳林鐘下旬於下総国千葉庄小弓郷清国寺書之

（坤末）皆永正十一天歳林鐘下旬於于下総国千葉庄小弓郷胤隆山下之

窓下書之嗚呼噫嘆東風々々々々漸愧不少 付与閑道人

○碧岩集抄 写 一〇冊 東京大学国語研究室旧蔵焼失

原本筆者未見。橋本「国語研究室焼失主要書目録（承前）」一〇〇頁

による。

○碧巖集古鈔 永正本（写カ） 石井積翠軒文庫旧蔵

原本筆者未見。『新編書籍目録』による。

おわりに

いずれの資料も室町時代語研究資料として興味深い。それらの更に精  
しいことについては別稿を用意しなくてはならない。

（一九九一年一月一日受理）